

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(7)〉

バオバブ保育園訪問記

―いずみナーサリーの保育実践へつなぐ―

塩崎 美穂

「ちいさな家」と「おおきな家」へ

幼保プロジェクトのメンバーで、東京都多摩市にあるバオバブ保育園¹⁾を訪問した。社会福祉法人バオバブ保育の会には、聖蹟桜ヶ丘駅前にある〇歳から二歳までの「ちいさな家」(二〇〇一年開設)と、そこから歩いて十分ほどの所にある〇歳から五歳までの「おおきな家」²⁾(一九七三年開設)がある³⁾。私たちは秋の土曜日に、「ちいさな家」と「おおきな

家」の両園を、遠山洋一園長に案内され、見学する機会に恵まれた。

私たちが「ちいさな家」を訪ねると、お父さんたちが組んだという木の固定遊具、木々や草花、菜園のある園庭に迎えられた。おしゃべりな九官鳥もいる。園庭が、子どもたちの生活空間であることが一見してわかる。園庭(室外)から連続した造りになっている室内に入ると、遠山園長は、「ここをつくる時、子ども目線で外が見える低いガラス窓にこ

だわったんです」といわれた。なるほど、部屋には、ちいさな子どもたちが這った姿勢からでも外が眺められる窓がある。「それ（低い窓）がだめならここは引き受けないといったんですよ」と、口数の少ない遠山園長が笑いながら教えてくださる。そして静かに「子どものためには譲れないことがありますね」ともおっしゃった。

「ちいさな家」は乳児保育園で、三歳になったら「おおきな家」に合流する仕組みになっている。いずみナーサリーも「ちいさな家」と同じように〇〜二歳児を対象としているが、「おおきな家」のように連続性のある保育の場をもたない（附属幼稚園には接続しない）。学生を含む大学関係者のための「職場保育所」的な形態をとっているため、利用者の子どもたちの家は離れた地域にある場合が多く、卒園後には別々の保育園や幼稚園に移っていく。今回私たちは、「おおきな家」（〇〜五歳を同一空間で



▲低いガラス窓

連続的に保育する園」と「ちいさな家」(〇〜二歳を一区切りとして保育する園)の違いやつながりを学んでみたいと思ひ、訪問した。

バオバブ保育園の遠山園長は、待機児の多い乳児のための保育園設立・運営を市から打診された際、園長と調理室を独自に置くことのできる独立園であることを条件にされたという。実際に「ちいさな家」には、遠山さんという園長がおり、安全でおいしい食事を作る独自の調理室がある。つまり「ちいさな家」はバオバブ保育園(おおきな家)の分園という形をとっていない。それでも「ちいさな家」の子どもたちには、卒園後、「おおきな家」に合流できる仕組みが整えられているということだ。

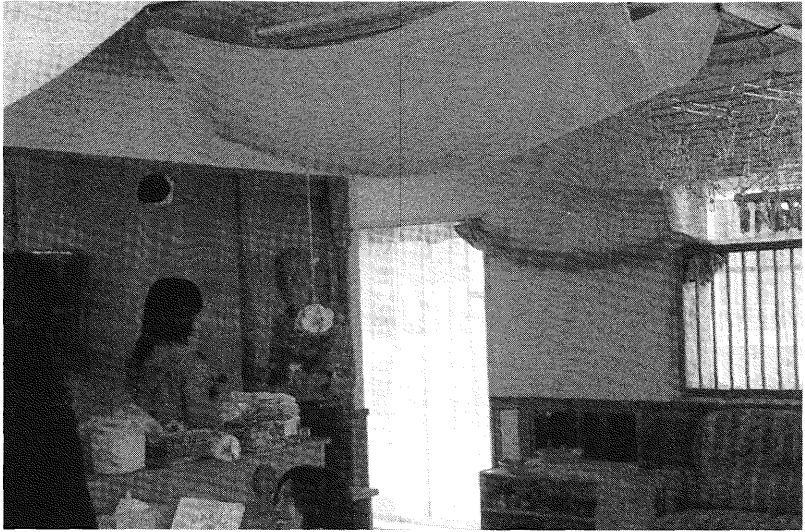
二歳から三歳というジグザグと育っていく「お年ごろ」の時期の子どもたちにとって、どのような保育環境が望ましいのか。昨今の家庭状況も考慮しながら二〜三歳前後の保育についての議論を重ねるこ

とは、今後の保育制度構想には欠かせない点である。同一敷地内に〇〜二歳の保育園、三〜五歳の幼稚園(預かり保育つき)という形で幼保一元化を進める「認定こども園」、二歳児を受け入れ始めている幼稚園、〇〜五歳の連続した育ちの中で二歳や三歳を保育する保育園など、現在、二歳から三歳前後の子どもたちは実に多様な保育制度の中にいる。乳児と幼児を別施設で保育するヨーロッパ諸国の就学前教育制度などにも学びながら、今後の乳児と幼児の接続については考えていく必要があるだろう⁵⁾。

「他園を見る」ことで日々の保育実践を振り返る

保育歴二年の川島さんは、バオバブ保育園訪問の感想を次のように語っている。

まず感じたことは、園全体に温かい雰囲気が見られている、ということでした。「温かい雰囲気」



▲布で覆われた照明

がどこからくるものなのか、施設の設備一つひとつを見ていくと、徐々にわかってきました。

一つは照明です。普通の蛍光灯をレースのような布で覆うことで、人工照明独特の刺激のある明かりが緩和され、自然光に近い穏やかな光が部屋を包んでいました。

もう一つは空間構成です。寝食がかかわる空間と遊びの空間が区切られていることで、子どもたちの中で生活の切り替えがスムーズにできるようになっています。また、遊びの空間のみにおいても三か所程度に分かれ、小グループになり集中して遊べるようにされていて、子どもが充実した園生活を送ることができるような配慮が行き届いていました。

小さな子どもに配慮した採光や照明、空間を小さく区切って生活や遊びを構成する在り方など、日本

の乳児保育実践の中で気づき、つくられてきたことの蓄積、保育の環境構成の智慧に触れたことは、川島さんのような若手保育者にとって、自園とは異なる保育を知る新鮮な経験だったと思う。いずみナーサリーではその後、保育環境としての玩具についての見直しを始めている。訪問から、自分たちの保育を振り返る機会を与えられた。

どこでも事情は同じだろうが、保育時間の長い保育者の研究時間は確保しづらい。長時間労働下では、職場内での交代制など勤務調整をしながら研究時間を確保しなくてはならない。問いの前に立ち続けるという「保育の構え」を持続可能にするためには、保育者自身が、今の保育が最善のものとして生成されているかどうかを考察する時間が必要である。日常の保育から少し目を転ずる機会が、日々の保育を可視化することもあろう。忙しく、ルーティーンワークに埋没してしまいうる時こそ、研

究時間の確保が大切ではないか。

保護者とのつながり

次が保育経験年数の長い増田さんの感想である。

バオバブ保育園ちいさな家の玄関に入ると、遠山園長先生が見学の私たちを笑顔で出迎えてくださった。

私は、保育園の温かい雰囲気とゆったりした時間の流れに感動しながら、先生の物静かで、何をしてもし受け止めてくださる人柄がバオバブ保育園の雰囲気をつくっていると思った。

部屋の入り口のネームプレートが絵本の一ページのようで素敵だったのでうかがってみると、保護者の手作りとかわり、びっくりした。○歳クラスの手すりにはめこんでいる木彫りの動物も、元職員の手作りと聞き、部屋のいろいろな所に保育



▲ウサギのぬいぐるみ

園を愛して協力してくださる人たちのぬくもりを感じた。

二歳クラスに置いてある、ウサギのぬいぐるみは、お母さんたちが自分の子どものために布を選んで手作りした、世界に一つしかない物だった。そのぬいぐるみには、離れていても常に保育園で遊んでいる子どものことを思っているお母さんの愛情が感じられた。

バオバブ保育園には、ぞうの会という父母と職員が自主的に運営している会があり、親睦会やフェスタ、親子観劇会、文庫の活動を行っている。と聞く。子どもたちのまわりにいる大人たちが時間を共有し、いろいろな活動を積み重ねている歴史が遠山先生を中心とした保育園を支えているのではないかと思ひ、とてもうらやましく感じた。まだ年月の浅いナーサリーが保護者とこれからどのように時間を重ねていくのか、今後の課題だと

思う。そして、明日の保育への活力をいただいで
帰途についた。

増田さんの指摘どおり、保護者とのつながりは保
育園の保育を構成する大事な部分である。遠山園長
は「やってみて気づいたのですが」と、第一子は
「ちいさな家」、第二子以降は「おおきな家」と、希
望園に差があることを教えてくださった。初めての
子どもの親は乳児のみの静かな園を求め、子育て経
験のある親はきょうだいも一緒に送り迎えのできる
にぎやかな園を求める。人数配置などでは同じよう
な条件の乳児保育を用意していても、そこに集う保
護者には有意な差が出てくるということである。保
育制度や保育施設という大枠（乳児保育をするとき
に幼児がいる園かどうかなど）は、意外にも私たち
のミクロな人間関係を規定していることがわかる。

また遠山園長は、「保育者と親との関係は、同じ
時代を共に生きるもの同士という対等な人と人との

かわり、相互主体的な関係だと思えます。難しい
ですけどね」ともおっしゃっていた。これには、バ
オバブ保育園の乳児保育の奥深さを改めて考えさせ
られた。保育者とはかく、大人中心の社会の中で子
どもに寄り添おうとするあまり、「子どものため」
を振りかざし保護者を糾弾しがちである。子どもを
急がせないで、ありのままを受け止めて、と。それ
は一見正しい主張のようではある。しかし、親も保
育者も相互に主体的になり、対等な関係になければ
子どもの生活は護れないと遠山園長はおっしゃるわ
けだ。親は「お客様」でないことはもちろん、「指
導」の対象でもない、同じ時代を共に生きる者だと
いう。遠山園長の何気ない言葉や、親と共につくっ
てきた保育から、多くを学ぶことができた訪問で
あった。

（お茶の水女子大学）

☆お茶の水女子大学附属いずみナーサリーの川島明希子
さん・増田真理子さんに協力いただきました。

註

- 1 バオバブ保育園の保育実践については、遠山園長の「園だより」を編んだ『バオバブ広場によるこそ！』一九九七年、『バオバブ広場出会いの日々』一九九九年、『泥と水と虫と子どもとおとな』二〇〇三年、『子どもの力 おとなの力』二〇〇六年（以上すべて筒井書店）に詳しい。
 - 2 内部的に「おおきな家」と呼ばれる園が「バオバブ保育園」、「ちいさな家」と呼ばれる園が「バオバブ保育園ちいさな家」である。
 - 3 この多摩市の二園以外に、稲城市（若葉台バオバブ保育園・一九九九年開園）と横浜市（バオバブ霧が丘保育園・二〇〇六年開園）にもバオバブ保育園がある。
 - 4 「乳児」とは児童福祉法の定義では〇歳児を指すが、ここでは保育所保育において、一般的に「乳児」とされる〇・一・二歳児クラス在籍児を「乳児」と呼び、「乳児保育」とは〇・一・二歳児クラスの保育を指す。
 - 5 「ちいさな家」は〇歳九人、一歳十一人、二歳十二人、一時保育十人強の園。「おおきな家」は〇歳九人、一歳十三人、二歳十五人、三歳十三人（「ちいさな家」からの進級児中心）と十五人（「おおきな家」からの進級児中心）、四歳二十八人、五歳二十八人、一時保育十人強の保育園で、二クラスに分かれている三歳は、比較的早い時期から一体で行動するようになるという。
- たとえば現在フランスでは、保育の研究課題の一つに「乳児期と幼児期の接続」があげられるという。フランスの場合、三〜五歳の幼児学校（スコルマテルネ）と小学校との接続はカリキュラム上も教員の互換性からもスムーズであるが、乳児保育と幼児学校の不連続が課題になっている。「保・幼・小の接続」という形で就学前教育と学校教育の接続に課題の現れている日本とは事情が異なる。保育・教育制度を構想する上で、どの年齢段階で施設の移行という「段差」を設けるのか、あるいは設けないのか、今後の検討課題であろう。